

FD研修「学際教育の方法」の開催 (2024/11/20(水) 17:00~19:00 @オンライン)

学際教育の方法
大阪大学FD研修/新任教員研修・教育能力開発プログラム

日時 11/20 (水) 17:00~19:00
開催形式: オンライン (Zoom)
※Zoomのインストールが必要です。
※ChatGPTアカウントをお持ちの方はご活用ください。
(無料アカウントでも可)

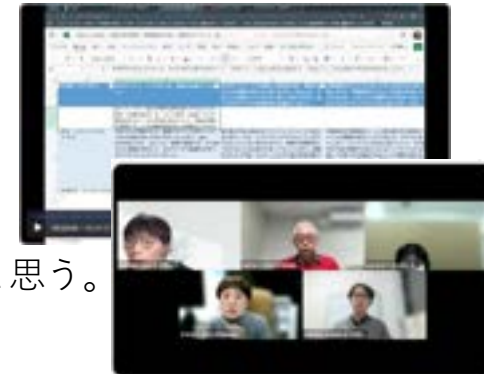
教職員対象
大学院生
学芸員
定員 16名

✓ 学際
✓ DWAA
✓ 知と知の融合
✓ 社会と知の融合
✓ 異分野連携
✓ ICT活用

大阪大学の学際教育の実践事例を体験し、学際教育を進めるにあたって教員は何をどのように教えたいかについて考えます。

日時: 2024年11月20日(水) 17:00 - 19:00 (Zoom)
主催: 学際大学院協議会(i-TOP) 教育実務推進部門
講師: 田原保輝・李明・堀井祐介
使用言語: 日本語
申し込み方法: QRコード(または下記のリンク) からお申し込みください。先着順となります。
<https://forms.office.com/r/w8QYZLJUp>
お問い合わせ先: 田原保輝 (tao.shun@osaka-u.ac.jp)

- 教員も知と知の融合ワークに取り組み、学際の楽しさや難しさを体感、共有し、学際教育の現状や課題への理解を深めることを目的とする。
- FD研修を2024/11/20(水)夕方にZoomで実施。参加者は16名 (途中入退室2名を含む)。
- ワークショップの流れ (120分)
 1. オープニング：学際教育が求められる背景と「大阪大学版 大学院での新しい学び方」の授業について 15分
 2. 共同研究ペアワーク1回目 30分 (研究紹介5分×2人+アイデア出し10分+ChatGPTでの検討10分)
 3. 共同研究ペアワーク2回目 30分 (研究紹介5分×2人+アイデア出し10分+ChatGPTでの検討10分)
 4. アンケート入力 約10分
 5. アンケートに基づくディスカッション 約30分
 6. クロージング：まとめ、その他ご案内 5分
- アンケート結果 (N=15)
 - 今回のペアワークは、学際教育を受ける学生に役立つものだと思う。(5段階評価) 平均 4.67
 - 今回のペアワークは、学際教育を行う教員に役立つものだと思う。(5段階評価) 平均 **4.73**
 - 今回のペアワークで体験した教育技法を自分の授業で使ってみてみたいと思う。(5段階評価) 平均 4.53



知と知の融合ワーク（※本日のFDでは2～5のワークを2回行います）

1. 異なる専門分野の大学院生とペアを作りましょう。相手が見つからない場合は、ティーチング・スタッフがペアとなります。
2. 研究テーマに基づく自己紹介を行いましょ（1人5分×2）。
3. まずは自分たちで共同研究テーマのアイデアを列挙しましょ（10分）。相手の分野を否定することがないよう、敬意をもって、建設的に話しましょ。
4. Chat GPTに、以下のプロンプトを入力します（5も含め、10分）。

「以下の2つの専門分野（研究テーマ）で共同研究を実施する場合、どのような研究が考えられますか？ A（専門分野名、研究テーマ）、B（専門分野名、研究テーマ）」

5. Chat GPTで得られた回答をみて、改めて実行可能な共同研究テーマかを検討します。

共同研究の可能性について

- 自分の研究テーマとはほとんど関係のないように見える学問分野であっても、共同研究の可能性が予想以上に存在したことが新鮮で衝撃だった。
- 学際融合した共同研究のテーマを考えるにあたって、お互いに理解が追いついていないところやどのような方向性で物事を考えていくのかなど、分野の違う人同士で興味深い差異があった。それを乗り越えるとより大きなイノベーションが生まれるかもしれないと感じた。
- 専門が **Digital Humanities** で人文学に情報技術をどのように活用していけば人文学が盛り上がるのかをいつも考えている。ペアワークで直接話を聞いて、一体何を情報化すればいいのかを具体的に考えることができたのがおもしろかった。

異分野同士で議論することによる学び

- 全く専門が違う方々とのワークで、自分自身の分野を再発見するとともに、異分野について学習できた。
- 決められた時間の中で議論することで知ることができる内容は思いのほか多かった。

異分野同士で議論する際に気をつけること

- 共同研究を考えるためには、自分の専門分野を相対化して、「位相（レベル）ごと」に自分の研究を説明できることや「位相ごと」にある程度の周知的知見を持つておくことが必要だと思った。
- 専門知識を持ち合わせていない人の興味や関心を伺いながら、言葉を選んで話していく過程がとても新鮮だった。
- 「他分野を尊重する」とは具体的にどのような言動か、ルールや指針を示すのがよいのではないか。

共同研究ペアワークの方法論について

- 学際的な学びに最初から関心があり、他分野へのポジティブな姿勢や最低限の理解がある学生には効果があると考えます。おそらく学部生には難しいだろう（大学院生を対象にしたワークではあるのでやむを得ないが）。
- ChatGPT からの提案も参考になったが、レベルが高すぎる提案もあり、少し戸惑った。
- 研究の話で盛り上がってしまい、情報共有でほとんどの時間を費やした気がする。
- 考える時間をある程度長くとることは重要だと思う。どうしても短い時間で煮え切らない議論を繰り返すと学生の方にも苦手意識や無力感が生まれてしまうと思うため。

- 研究テーマの記述の粒度、解像度を合わせる事がなかなか大変なので、訓練を繰り返すことが大切だと思う。

共同研究ペアワークの成果物について

- 異分野の学生が集まるアイスブレイクとしても使えると思う。ただ、アイスブレイクだけにしてしまうのはもったいない気もするので、実際の学際研究につながるような仕掛けがあってもいいと思う。
- 実際の授業では、その後さらに議論を深めたり、他のペアの話題を共有できたりするとよさそうだった。
- 特に成果物の提出をもって成績評価を行う場合、このペアワークは有効だった。
 - 何か共同で作業する目標をセットすると話し合いもスムーズに行えそうだと思う。(共同でポスターを作るなど)
 - 学習成果の評価などを思えば、研究計画書などのアウトプットをまとめさせるべきだろう。

共同研究ペアワークの活用方法について

- 幸運にも2回のペアワークのどちらでも活発にアイデアが生まれたが、学生どうして話題が盛り上がらない場合、試しに生成AIに聞いてみよう、とできるのは良いと思った。
- PBL（問題解決型）授業で課題テーマや課題解決の際にアイデアを出す手助けになる。
- 学部生でまだ専門性が高まっていない時点でも、お互いの関心のある学問領域について説明しあうことはよいコミュニケーションを生むのではないかと思った。
- 今後歴史一般の講義を担当することになった場合、異なる問題関心（フランス史や中国史）を持つ学生のグループワークやコミュニケーションを促進する際に、今回の教育技法は重宝するのではないかと感じた。
- 私の授業でもエア共同研究と称して、人文学の研究に情報学のノウハウをどのように役立てるかのアイデア出しをしている。ただ、今年度は試行錯誤で自分のやっていることは適切なのか多少考えるところがあった。今回のワークでは、ペアワークやChatGPTの活用があり、自分の授業にうまく取り入れてみたいと思った。
- 話している人が聞き手に伝わったのか、伝わっていないのかを知ることができるきっかけ（質問やコメントによるフィードバックなど）として使えるといいと思う。
- 企業での社内教育を企画する際に他企業の方とアイデアをすり合わせて新たな価値を創造していくことに使えそうだった。

学際教育を実施する際の工夫について

- 学際研究や学際教育で、異分野の方の研究についてその概要は知ることができたが、それで止まってしまう、ということもよくあると思っていて、その研究の今後の展開や社

会に与えるインパクトなども深堀して共有できる機会があるとより理解が深まると思う。そういう意味では、講義は少な目で学生参加型の授業が良いと思う。自分の研究を知ってもらうことと、他者の研究に興味を持つことのトレーニングになるような授業としては、コミュニケーションをする、という仕掛けは必要だと思う。

- 社会的意義を具体例を示しながら伝えられると良い。
- 授業の始めの段階では、専門用語をなるべく取り払った講義を行うのが良いのではないかと思った。
- 自分自身（授業実施者自身）が異分野の学習や交流をする。
- 学際教育はそもそも「他分野の学生とのコラボレーション」と同義ではないはずで、各大学の学際教育の類型には他の方法もあるのではないか。たとえば、伝統的な教養教育が担っていたような、個人の学生が他分野の学びを行うことも学際的であるはず。学際教育の方法のバリエーションを拡げていくことが必要ではないかと考えている。
- 「学際的な学びに最初から関心があり、他分野へのポジティブな姿勢や最低限の理解がある学生」を増やしていけるような、そもそもの学際教育の意義を伝え、理解を促す機会を設ける必要性がある。(学部から)必修化や選択必修化が検討されてもよいのではないか。
- 学際を意識しなくても自然と学際教育になるようなカリキュラムがいいと思う。
- 所謂フィールドワークが良いとは思いますが、一般的な調査に入る形、「視察」的なものでなく、できればそのフィールドで雇用契約などを結んで、実際に給料をもらう（すなわち責任が発生する）等の当事者により近い形で異分野の専門家と協働する方がより深い気づきが得られるような気がする。
- 企業に入ると、昇進しなければ異なる分野の人間と仕事することは無く、視野狭窄になりがちである。上司になった際や顧客と対話する際にそれだと苦勞するので、今後は専門がはっきりしている若い世代ほど、このように学際的な経験を積む必要があると思う。

教員向けワークショップ「学際教育ってどうやって教えるの？」の開催 (2024/5/21(火) 19:00~20:30 @オンライン)

学際教育担当者向け
ワークショップ

ONLINE
開催

学際教育って どうやって教えるの？

2024/5/21 (火) 7p.m. - 8:30p.m.

最近よく耳にする学際教育、文理融合教育、総合知教育。学生に多様な科目を提供するだけでよいのでしょうか？教員は何を教えたらよいのでしょうか？阪大での実践を体験しながら考えます。

会場：オンライン開催
日：2024年5月21日(火)
時間：19:00~20:30
参加費：無料
講師：佐藤浩幸 / 田尾俊輔 (大阪大学学際大学院機構)
ご予約：メールでお申し込みください。当日までにZoomリンク等をお送りします。
宛先：tao.shunsuke.itgp@osaka-u.ac.jp (田尾) 件名：5/21ワークショップ参加申込
内容：①お名前 ②所属 ③学際教育にまつわる経験などありましたらお書きください。
締切：2024年5月20日(月)

- 教員も知と知の融合ワークに取り組み、学際の楽しさや難しさを体感、共有し、学際教育の現状や課題への理解を深めることを目的とする。
- 試行版を2024/5/21(火)夜にZoomで実施。参加者は14名。
- ワークショップの流れ (90分)
 1. 学際融合教育科目「大阪大学版 大学院での新しい学び方」の紹介 (開講経緯の説明と実践報告) (6~7分)
 2. 知と知の融合に関するレクチャー (10分)
 3. 知と知の融合ワーク (20~25分×2セット、各セットでペアを変更)
 4. アンケート入力 (5~7分)
 5. アンケート入力内容に基づく意見交換 (15分)
- アンケート結果 (N=12)
 - 今回のWSの内容は、学際教育を受ける学生に役立つものだと思う。(5段階評価) 平均4.25
 - 今回のWSの内容は、学際教育を行う**教員**に役立つものだと思う。(5段階評価) 平均**4.42**
 - 今回のWSで体験した教育技法を自分の授業で使ってみたいと思う。(5段階評価) 平均4.58

教員向けワークショップ「学際教育ってどうやって教えるの？」の開催 (2024/5/21(火) 19:00~20:30 @オンライン)

- ワークショップの感想 (一部を編集の上、抜粋)
 - **学生だけでなく、教員同士で行う場合でもなかなか難しい (そして重要な) 取り組みのように思いました。** (異分野の教員同士で、教員の専門分野に根付いた教養科目を作り出す取り組みに関わったことがあります。なかなか進まず大変でした。)
 - **学際教育でこのような取り組みは大変面白いと思います。**あとは、異なる分野で研究を進める人同士が会う場をどのように設定するのが難しいなと感じました。
 - それぞれの方と研究の話が盛り上がりすぎて、ChatGPTの使用に至りませんでした…。ただ裏を返せば**異分野の人と話すということ自体がとても興味深く貴重な経験なのだと思います。**
- ワークの技法を授業でどのように活用できるかについて (一部を編集の上、抜粋)
 - **ある程度専門性を学び、学生自身の専門知識や研究トピックが固まってきた以降の学生を対象とすれば、効果的だと感じました。**ただ、教員と違い、異分野の人たちと研究についてディスカッションする機会があまり無かった学生も一定数いると考えられるため、初期の頃はディスカッションテーマ、ポイント等を少し例示してあげたほうが良いのかもしれないとも思いました。
 - 初年次教育 (学部1年生) で、グループでテーマを決めて小論文を書くという内容を実施しています。論文やレポートの書き方を学ぶという部分が主目的ですが、テーマ決めといった部分で手こずる場合も多いです。**グループで行き詰まった場合には、自分たちの興味関心から、ChatGPTでアイデアを出してもらって、テーマ決めという設定も可能なように感じました。**
 - ChatGPTの功罪もあるため、考えないで答えを導こうとする学生には、まずしっかり考えてから、後半で使用するのもよい。
 - **各々の研究の価値提案を先に考えさせてから、実施するとよいかもしれません。**
 - 将来的に学部でゼミなどをもつ場合、興味関心の方向性は同じであっても、**テーマや対象は異なると思うので、他者の観点と統合して協働することを学ぶ**というようなことも考えられるかもしれないと思いました。